



低平地集落のかたち



後藤隆太郎
Ryutaro GOTO

佐賀大学大学院工学系研究科 准教授

1. 集落＝集住のかたちを読む

集落のかたちは住むための知恵や工夫の集積ととらえることができる。先にデザインがあるのではなく、自然条件の中で住み着くため、人々が集まって住み継いできたことがかたちに現れる。本特集のテーマに沿わせば、集落のかたちに見いだせる空間的仕組みの解説とは、その背後の自然や生態系との対応、さらには人を生態系の一部と捉え人々の社会や集住の有り様を考えることといえる。

低平地は降れば洪水、日照れば干害というように、湿潤であるがゆえにそのままでは住み難い場所である。いかに集住するために土地を獲得したか、各屋敷地の集合としてどのように集落空間を成り立たせているか。建設当時の計画図があるわけではないため、現状の実態が資料の基礎となる。史的な解明ではなく、実態からの考察、空間計画に関する知見として整理するのが主たる目的である。その知見は計画実践に適用できる機会は少ないが、今日の空間計画に抜け落ちているもの、つくり手の立場から集落や集住とは何かを考えさせてくれる。

2. 平野の生業と集住

集落のかたちを捉える前に、集落は単なる住宅地ではないことに触れたい。農村や漁村など、そこでの生業、基本的に農耕や漁など関わって集落は存在する。ただし、低平地の農村といっても川、水路からの恵みもあるし、沿岸部の漁村といっても、たとえば東日本で津波被害に遭った多くの三陸漁村なども基本的に半農半漁である。近代のある産業に特化した新村（例えば近代の干拓とセットになった入植地）を除けば、多様な自然との関わりのなかで採取や生産をおこなっている。一方、住宅地とは近代の都市域拡大や俸給生活者とともに成立したものであるが、低平地の集落は、

周囲が農地などの田園であり、田園の中に集落がある、さらにいえば田園地域がないと集落は成立しない(図-1)。ここには「土地に刻まれた歴史」、自然や生業とかかわったかたちが見て取れる。集落が成立したところは自然との格闘があり、自然に配慮するといった生半可では成り立たないことが地形図一つからも推察できる。

現代は道路整備が進行し、生活や生産に不可欠な「水」などのライフラインは公共事業により充実した。格段に生活が容易になったといえるのが、特に自然と関わった生業と切り離された住宅地、それが高密度な市街地であればなおさらに、自然や土地に対する人々の感性は退化していないか、災害にあって自然の上に成立する土地やそこで集住をあらためて知ることになる。



図-1 低平地のクリーク網と集落分布（国土地理院旧版地図より）

2. 微地形と集落

2.1 クリーク集落：土を掘って盛った土地に住む

低平地に住み着くために、まずどのように土地を確保したのか。

クリーク地域において集落はそれを囲むクリーク形態からいくつかに分類できるが、図-2はクリークの密度が高く、ひだのように複雑に入り組んでいるタイプである。佐賀市の東部や神崎市などにみられる。

今日のクリーク地域は、農地改良事業で矩形の水路網として再編されているが、その従前図、整備前に詳細の土地の標高が記録された資料から、集落の居住域は周辺の農地部分よりも20cmから50cm程度とわずかであるが標高が相対的に高いことが分かる¹⁾。

つまり、このクリーク（ほり）が必要という以上に土地を高める必要があり、土を掘って土地を笠上げたのではないか。その積み重ねによりこのように周囲よりもさらにクリーク（ほり）の密度が高くなっているとの仮説が成り立つ。

集落をよくみると、橋及びかつては橋であったと考えられるものが合計16カ所認められ、クリークで囲まれた島状の空間単位がいくつもあり、それを橋や道が結んでいることがわかる。このことから、橋や道があらかじめ計画されたのではなく、島状の空間単位が基本にあり、それらを結びつけたものが「道」といえる。

クリーク（ほり）を掘って土を取り、その土で空間単位ができる。その島状の空間単位とクリーク（ほり）は同時に成立させ、それを道や橋によって連続させた空間システムとなっている。低平地に住むこと、自然環境に対して人為的な営みを繰り返した結果として、この集落のかたちがあると考えられる³⁾。

2.2 堤防集落：旧堤防の高まりに住む

今ひとつ、低平地に住み着くための方法として、高まりを見つけて住むことが考えられる。そこで注目されるのが堤防集落（堤塘集落）である。この形式は、有明海沿岸部に限定されるが、繰り返された干拓による人為的な微高地＝堤防に目をつけたことは容易に想像できる。

図-3は、佐賀市川副町の早津江川に近い場所、複数の旧堤防が交わったところにつくられた集落である。旧堤防上の道にそった住居群を中心として、その若干の高まりからの傾斜地、さらに低地（旧農地）からなる。調査から集落の形成プロセスは、はじめに高まりに住み、次第に低地に進展



図-2 クリーク集落の空間構成

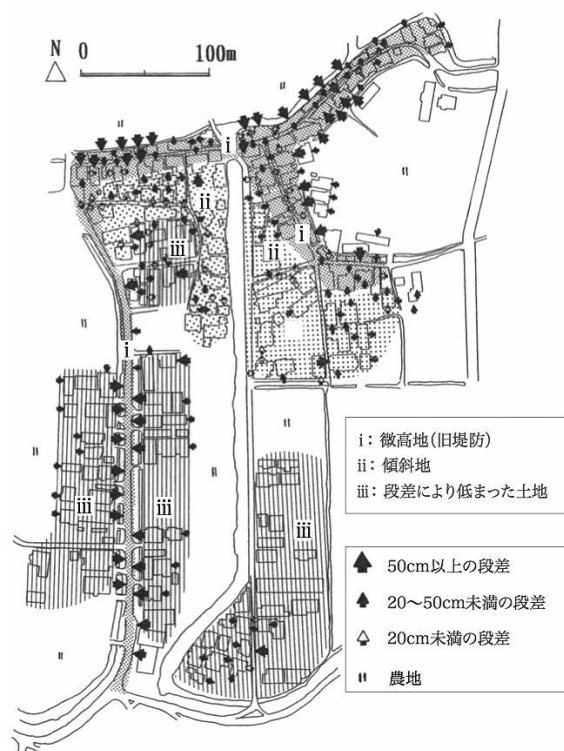


図-3 堤防集落の空間構成

することがわかった²⁾。

堤防集落は、かつての堤防部分＝人工的地形に依拠して形成している。クリーク集落が低地やク

リーク地域の中に立地することに対して、堤防集落は干拓地等の土地のまとまりの際（キワ）であり人為的につくられた高まりの活用である。

また、この集落の進展は、海や川の方へ向かう。すでに堤防の内部は農地が形成しており、干拓地であるものの居住者の多くは近隣から移住した漁業者等である。微高地を利用しつつ、もとは干潟や海の辺であったという自然環境がこの集落のかたちに影響しているといえる。

3. 屋敷地

3.1 屋敷地の実態と基本原理

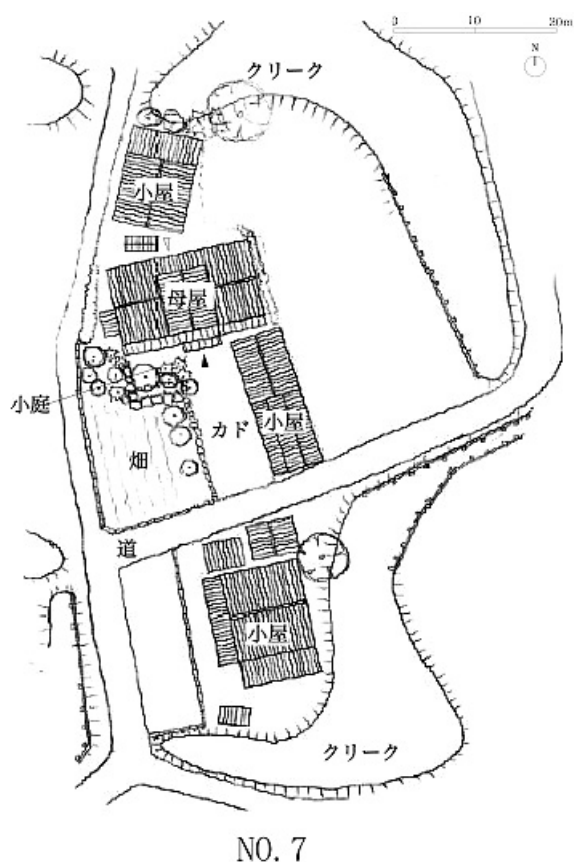


図-4 屋敷地（クリーク集落）の空間実態

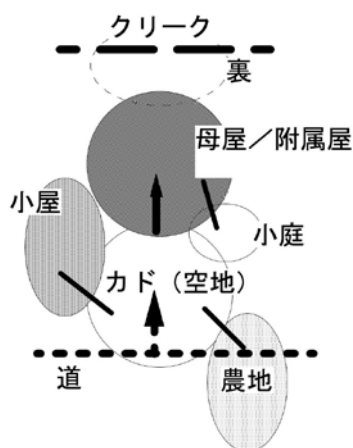


図-5 屋敷地の基本原理

ここで、あらためてクリーク集落に注目し、その社会的単位である家族の生活の場、屋敷地を読み取ることとする。

図-4⁴⁾は、現地調査よりえられた一つの屋敷地である。母屋は屋敷地北側のクリーク近傍に建てられ、南入りでほぼ共通する。母屋の南側にカドとよばれる空地を持っている。そのカドを囲むように、小屋や小庭（観賞用の庭）、屋敷地内の畑などが配置される。カドは農家にとって農作業の場や干し場として利用されていた。今日においてもカドを中心とした構成は基本的に維持されている。また、このカドを介して道や外部へと通じている。屋敷地は基本的にクリークに直接面しているが、特に母屋の裏（北側）、母屋の台所の近くにクリークに降りる階段状のタナジがある。これは水道が普及する以前クリークを生活用水として利用するための施設であり、かつては各屋敷地にみられたものである。このような屋敷地の構成を整理すると、道－カド（小庭、畑、小屋、母屋）－クリーク、としての基本原理を見出すことができる（図-5）。

一見して集落はクリークや道が入り組んだ複雑な形態にみえるものの、それぞれの屋敷地には、生活と環境に対応が組み込まれた空間パターンを有している。先に触れた土地を高める行為は、この屋敷地の空間を成立させるため也不可欠であり、集落－屋敷地の相互関係は、自然と対応しつつ人々の生活空間を実現する生態的なシステムと捉えることができる。

3.2 みち－屋敷地の展開

以上のような調査研究の一部を、低平地の田園地域において、居住地のガイドライン⁵⁾として提示する機会を得た。

具体的には、一団の土地を住宅の屋敷地とするために、東西に道を通し、個々の屋敷地はその道を介して北側と南側にまたがる画地の方法を提案した（図-6）。間口に対して奥行きが長くなるが、



図-6 道の南北に展開する屋敷地の提案



図-7 屋敷地の断面や景観への提案

北側の敷地に主に母屋などを、南側は主に菜園などを想定している。道は上述したカドの延長としての性格をもたせ、沿道には塀はつくらず、実のなる樹を植えることを奨励する。開かれた道空間と南面する建物、それが連続する田園地域の家ができるのではないかと考えた（図-7）。

この提案の対象地は小城市芦刈町の生活拠点地区であり、ミニ開発などでばらばらに住宅地が造られるのではなく、学校などの公共施設の集まる当地区内に住宅を誘導、かつこの地域に則した住宅地が求められている。拘束力の弱いガイドラインであり未だ実現はしていないが、低平地集落における住まい方の一つの展開として実現されればと思う。

4. 生態的な集住への視点

最後に、低平地の生態的な集住空間づくりに向けたいくつかの視点を提示してまとめとしたい。

①場所の生態

低平地などの自然の厳しい環境では、かつて人々が住むため行ってきた営為を鑑み、その場所に敏感になること、気候風土や災害を含む自然環境に現代の我々はもっと敏感になる必要がある。

都市拡大時に農地の宅地化が多く行われてきたが、今日の居住収縮下（人口減、空き屋・空き地の増加期）では不合理であり、そもそも「農地転用」により新たに生態的な集住の場をつくり出すことは容易ではなく、場所への配慮を欠く場合は災害時に大問題が生じる可能性もある。

②生態的な屋敷地と共同性

それぞれの屋敷地の空間構成は集住のかたちに

影響する。周囲を含む自然環境との関わりが少なくなりがちな現代の住まいについて、地域のくらし方や生態系を取り込むことがより豊かな住まいづくりと言えるのではないか。住宅内部で生活を完結するのではなく外部の環境と関係づけること、屋敷や住まいが外に開かれて生活が垣間見られることは、防犯にも貢献するとされており、結果として集住地の共同性やコミュニティーの醸成に通じるのではないか。

③建設資材と生態

以上に加え、建物など建設資材が地域の生態系に関与するとの視点も重要である。現在の資材流通はグローバル化が進んではいるが、地域の山林利用、かつて集落の家造りで活用された河岸や沿岸の葦（よし）利用など、ごく一部ではあるが地域産材活用が試みられている。

以上、土地（場所）、屋敷、住まいの各段階で地域との生態的な関係が再構築できれば佐賀や低平地ならではの生態的な集住やその暮らしの実現といえるのではないか。

参考文献

- 1) 後藤隆太郎・中岡義介・竹下輝和「佐賀低平地における土地とホリの対応からみた集住地の空間構成」、日本建築学会九州支部研究報告、第40号・3、pp.65-68、2001年3月
- 2) 後藤隆太郎・中岡義介「佐賀干拓地にみる自然的ウォーターフロントの土地と居住地の形成に関する考察」、日本都市計画学会論文集、No.32、pp.703-708、1997年11月
- 3) 後藤隆太郎「クリーク」（日本建築学会編、『集住の知恵美しく住むかたち』所収）、技報堂出版、2005年7月
- 4) 山口 穰（当時佐賀大学学生）による。
- 5) 後藤隆太郎、丹羽和彦他「田園地域における拠点地区のあり方と整備計画の検討－小城市芦刈町三王崎地区を事例として－」小城市受託研究報告書、2007年2月